

# 皮膚病 『がんべ』

釧路中部事業センター標茶家畜診療所 診療課 獣医師

佐々木 瑛子

皮膚病と一口に言っても、湿疹やイボができるものなど様々ですが、今回は子牛や育成牛によく見られる「がんべ」（もしくはトクフク、白癬）についてお話しします。

牛の皮膚病は薬剤を塗布するか、見た目さえ気にしなれば放って置いたら治るという認識の方も少なくないと思います。しかし実はこのがんべ、ただ一過性の感染症ではなく、農場の子牛管理を見直す為の手がかりとなることがあるのです。

通称「がんべ」は正式には皮膚糸状菌症という名称の病気で、トリコフィトン属の真菌が感染することによって起こります。主に頭頸部にフケを伴った病変（図1）を形成します。みなさんも一度はご覧になったことがあるのではないのでしょうか。皮膚病が蔓延する傾向にあります。皮膚糸状菌は牛舎の構造物、特に柵やスタンションなどの金属製のものに定着している常在菌で、それらに顔をこすり付けることで感染しますが、本来そんなに悪さをするような

ものではなく、免疫が低下した状態に発症する『日和見感染症』です。ではそんなに弱い病原体に付け込まれてしまうほど、子牛たちの免疫が低下するのは何故なのでしょう。免疫低下の原因を探るにあたり

考えるポイントは「ストレス」と「栄養不良」です。離乳や除角、牛群編成の変化：・体がしっかり完成するまでの子牛や育成牛は、私たちが想像するよりも様々なストレスイベントを経験します。それに加えて哺乳量や配合給与量と足りない、親の余り餌を与えているなど、必要エネルギーの多い成長期に栄養不良に陥ること容易に免疫力の低下が起こります（図2）。したがって、集団で



図1 皮膚糸状菌により頭部に多数の脱毛とフケがみられた和牛

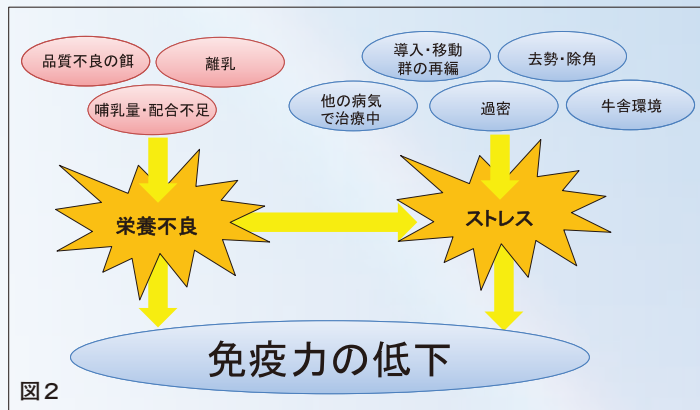


図2

発生したり、同じ時期の牛ばかり発症したりする場合は、その牛群に栄養不良およびストレスがかかるような飼養管理を行っている可能性があります。

実際に真菌性皮膚病が多いという相談を受けて飼養状態を聞き取りしていくと、離乳期の子牛に真菌性皮膚病が多発する農場もあれば、育成期のみが多発する農場があったりと農場ごとに特徴がありました（図3）。そこでそれぞれの飼養管理を改善してみたところ、農場における真菌性皮膚病の発生は減少、もしくは発生

図3

	A農場	B農場
頻発時期	離乳期	育成期
考えられた原因	段階的に離乳しない	品質不良の草と少ない配合飼料
	離乳と同時期の移動	過密な飼養環境
	スターターを使用せず親の配合を与えていた	群の再編成が頻繁
飼養管理の影響	離乳期の体重減少および発育不良	卵巣静止が多い毛並みが悪く下腹が出ている

しなくなりました。診療を依頼しなければならぬほどの下痢や肺炎が多発するわけですから、皮膚病が出たという程度のサインは見逃されがちかもしれません。確かに真菌性皮膚病が原因で命を落とすようなことは減少にありま

せんが、搔痒（かゆみ）によるストレスで増体の低下が起こり、市場での評価も低下します。なにより真菌性皮膚病の発生をきっかけに栄養不良状態を改善することで、増体率の改善、卵巣静止牛の減少、疾病発生の減少などの効果も期待できるでしょう。

どうしてその時期の牛ばかり真菌性皮膚病になるのか、それをきっかけに農場の弱点を探っていくことが、より良い哺育・育成管理につながることは間違いありません。